

チャネリング詩について

声が聞こえるわけでも何かがみえるわけでもありませんが、何かを訊ねても、何も訊ねなくても、言葉が泉のように沸いてきます。それはまるで枯れることのない永遠の泉のようです。

私ではない別の存在、かといって特定の存在ではなく、しかしどこかでもう一人のわたしの深淵からの声のようでもあり、片時も離れず暖かく見守ってくれている永遠の存在のようでもあります。また言葉を変えれば、多次元からのメッセージのようであり、太古の未来の記憶のようでもあります。物理的にいえば、空間や身体を満たすみえない粒子の情報を受け取っているように思います。

自動書記ともチャネリングとも違うまったく別のもの新しいもの思っています。人に伝えるために適切な言葉がないため、しかし一線を画すために「チャネリング詩」の言葉にしました。読んでいただければ違いに気付いていただけるでしょう。

第三者的にチャネリング詩を時々読み返すことがあるのですが、面白いなと思うのは、

読むたびに印象が変化し新しい発見があることです。言葉の美しさ、厳しさ、凜とした時間の流れにところが震えることもあります。

送られるメッセージの速度にペンが追いつかないこともしばしばですが、言葉を受け取る立場の人間として反省することが一つあるとしたら、驚くような言葉や意味不明の言葉に時々手が止まるときです。

私にも理解不能な部分がある難解なチャネリング詩ですが、宝物が隠されていること、これだけは自信を持って言えます。このチャネリング詩集が、意識を変える、世界を変える、一滴の滴になればと願います。

2008年2月26日

ふるいちまゆみ